
恋路の闇

麻戸 槩來

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋路の闇

【コード】

N8106U

【作者名】

麻戸 槩來

【あらすじ】

同棲しだしてから半年。別段刺激もないが、少し気弱な可愛い彼女との生活に俺は満足していた。彼女との生活が心地よいあまり、俺は見逃していた。彼女の抱えている闇を……。「お願い、そんな目で私を見ないで！」彼女が逃げ出した事でようやく、眠っていた獅子が身を起こした。少し、読みにくい部分などに手をくわえましたが、読み返す必要があるほど大々的には変更してません。

1 闇の現（前書き）

基本、煮え切らない部分が多くイライラすることも多いかと思いま

すが、とまごう宜しければお付き合いください。

蓬郷 はかな 儂と最上 もがみ 暁の物語 あかつき。

1・闇の現

はかな
儂の手を暁^{あかつき}が捕らえた。

儂はこういう時の暁の眼が怖くてたまらない。

まるで自分の心を見透かしてしまいそうな程、透明できれいな暁の
うすい
グレー
灰色の瞳。

それでいて、その奥に炎を宿しているような暁の……瞳。

どうしても、その瞳にさらされる事が耐えられずに目をそらす。
そんな目で見つめられたくない。
かつきの瞳を見ていると、優しいはずの彼が肉食の獣のように見え
る瞬間が
あるのだ。

愛しいはずの彼が、今は怖くて怖くてたまらなかった。

お願い、そんな目で私を見ないで!!

僕は手を何とかして手を振りほどこうとしたが、バランスを崩して床に倒れてしまった。

…これまで、独りで耐えてきたの

今更、頼っていいと言われても、やり方なんて分かる訳ない
どうかお願い、私の中をひっかきまわさないで

貴方が私に、何を求めているのか分からない…

1・闇の現（後書き）

恋路の闇……恋い慕う情に苦しんで、物事の区別も分からぬこと。

闇の現……暗闇にまぎれた現実。乱れまどう時の、わずかの間の本心。

両者とも広辞苑より

2・兆し

…同棲しだしてからも。

儂はいつも、何かに怯えているようだった。

そんな儂に気付きながら、俺は何もしなかった。

いや…出来なかった。

前に一度、夜中に目が覚めて水を飲もうとリビングに行くと、小さな音で曲が

流れているのに気づいた。

俺と儂は、彼女が一人になる時間も必要だろうと別々に休んでいる為、彼女が

起きているのかと、気軽に思っていた。一度、とある理由で彼女が倒れてから

なるべく負担をかけないようにと考えた結果だ。

中をのぞくと予想通り彼女がいたのだが、暗闇のなかで儂が毛布にくるまって

震えているのが見える。

この寒い中、暖房もつけずにいるのだから当たり前だ。

しかし、暗闇の中で歌を口ずさむその姿に、どこか俺は違和感を覚え儂に

そっと近づいた。

「儂………？」

びくっ

儂は声をかけると身体をからだ一瞬震わせた。
やっぱりおかしい…。なにも答えない。

「…儂？眠れないのか？」

恐る恐るといった様子で、俺は儂の横に座った。
こんなことは正直初めてで、戸惑っていたのだ。何か眠れなくなる程のことがあつたのだろうか…。

顔をそつとのぞき見ると、彼女の顔に光るものを見つけ驚いた。
どうして泣いているのか理由もわからないまま、思わず儂のことを抱きしめた。
しかし、そんな俺の行動に彼女はまた一瞬大きく震える。

「いつ…いや！！」

儂は弱弱しく抵抗したが、そんな事も気にせず俺は儂を抱きしめ続けた。

こんな風に拒絶されるのは初めてで、どうして…そして何におびえているのか

考える余裕もないまま、彼女を放す事は出来なかった。

けれどその晩、最後まで儂の身体から緊張がとけることは無かった…。

3 プライオリティー（前書き）

少し長めです。

3 プライオリティー

あの晩からしばらく経ち、久しぶりの休暇を僂と満喫しているときにふと、電話が鳴った。俺は僂の様子を気にし、ためらいながらも電話に出た。

去年から責任のある役職を任された暁は、最近忙しくなかなか早く帰れない事が多かった。三十代前半という事もあり、若いという事だけで舐められている部分がある為、こちらも必死だ。確かに、経験の差などをあげていたらきりがないだろう。

しかし、それに見合うだけの努力を今までしてきたという自負があった。

そしてとうとう、この仕事が落ち着けば、ようやく認められそうなところまで

こぎつける事が出来たのだ。

…だが、そのかわりに僂との会話が極端に減ってしまった。

そもそも、僂と同棲を始めたきっかけは、彼女が職場で倒れた事だった。

馴染めない職場で四年以上頑張っていたのだが、医者に倒れた理由を聞いた時は

愕然とした。

僕が倒れた原因は、極度の過労と軽い栄養不足だった。

俺からしたら、夜間の残業などは当たり前だったため、特に違和感を覚えていな

かったが、人間関係がうまくいっていなかった僕は、雑用からなにかから請け負って、

昼食はとらないことのほうが多かったらしい。出逢った頃は昼をよ

く一緒にとって
いたが、その頃は時間が合わず、どうしているのか把握していなかつた。

何故そこまでしていたのかと始めは責めてしまったが、高校を卒業する前に両親を

亡くした僕は認められようと必死だったのだろう。

現に彼女は気が弱すぎると感じる面はあるが、同棲しだしてからもよくやってくれ

ている。

祖父母の事が好きだった俺は、二人が亡くなった後にこの一軒家を譲り受けた。

そのため、この広い家をきちんと管理し、スーパーなども遠いこの環境に慣れて

くれた僕には感謝している。

ところがこの頃、僕の様子がおかしかった。

何か言いたげな視線を送ってきたと思えば、急によそよそしく接し

てきたりする。

はじめは浮気なども心配したが、どこか疲れた様子は、とても「新しい恋に舞い上がっている」「ようには見えなかった。

そのため、忙しいプロジェクトの合間に、なんとか今日という休日をもぎ取り、僕とのんびりしようと考えていた矢先の電話だった。

……悪い感はあるもので、その電話は仕事の件でどうしても外せない用件だった。

「ああ、分かった。今からすぐ向かう」

電話を切ると、いつもの間にかキッチンから出てきた僕がそこに立っていた。

俺のことは聞いていたのだろう、小さな声で問いかけてきた。

「……仕事、いつちゃうの?」

そう聞いてくる様は、どこか親と放される子供のように頼りなさげだった。

少し心細そうに言った彼女が可愛くて、俺はあやすように僕に言った。

「どうしても外せない仕事なんだ。でも、この仕事が終わればもつと休暇も取れるし
今までみたいに帰りが遅くなる事も減るよ」

これまで広い家に彼女一人残していたが、ようやく寂しい思いをさせずに済む。

いつもの儂なら、ここで喜んで引き下がるはずだった。
でも、この時の儂は違った。

「どうしても…今、なの？」

そう、さらに言い募ってきた。

儂が仕事のことでは何か意見するのは初めてだったので、驚きはしたがこの時の彼女の反応を、俺はただの我が儘だととらえてしまった。

「儂。だいじょうぶだよ、すぐ戻ってくる。

ほんの二、三時間だけだよ」

だから待っててねと、明るく言いきかす俺に対し、儂はだんだん表情を曇らせ涙目になってきた。仕事に行くといって引き留められるどころか、泣かれる事すらなかったため内心動揺していた。

一体どうしたというのか。様子がおかしい儂のことは気になるが、

今はそんな事に
かまっている時間は無い。先ほど電話を受けてから、だいぶ時間を
くってしまった。
もう、出なければ…。

「ねえお願い。あと少しでいいから待って！」

夢がこれほどまでに何かを望むのは初めてだったが、俺としてもい
かなければなら
ない。俺は彼女の様子に引っかかるものを覚えながら、後で事情を
聴けばいいと話を
打ち切ることにした。

「夢、もう時間がないんだ。早く行けばその分だけ早く帰ってこら
れるん

だから。ね？」

「だめ！だめなの、それじゃあだめなの！！」

叫ぶように言った後、彼女はとうとう涙をこぼした。

明らかにその様子はおかしいとは思うが、仕事をしなければ夢を食
べさせていく
ことは出来ない。

このプロジェクトはチャンスでもあるが、賭けでもあった。失敗す
る訳にはいかな

いのだ。

「ごめんな、もう行くよ」

「いや、お願い！いかないで…いかないで…！」

ボタン

俺は無情にも扉を閉め、会社へと急いだ。

4・千慮の一失(前書き)

話の長さが、統一性なくてすみません。

4・千慮の一失

二時間後。俺は早々に仕事を片付け、足早に家へ向かった。

きつと俺は機嫌が悪くなっているだろう。

何か、お詫びのためにも買って帰ろうかと思ったが、俺としても早く夢に逢いたい。

今日のところは家路を急ぐことにした。

がちゃん

家に着いた俺は、すぐさま扉を開け叫んだ。

「ただいま夢！

な？ やっぱり早かっただろう？」

リビングに行くが、彼女の姿は無かった。

ああ、きつと拗ねて寝室かどこかにいるんだな？

ここまで、俺との時間を大切にしてくれている夢を愛しく感じていた。

「はかなあ？ごめんってば。機嫌なおして出てきてよ」

寝室。トイレ、風呂場…。

イ・ナ・イ…。

家中探しまくって、俺は徐々に不安になってきていた。

俺がいない…。どうしてだ。そんなに仕事に行ったことが許せなかったのか？

たった二時間かそこら、子どもでも待てる時間がなぜ俺に待てない事がある？

不安を通り越し、怒りを覚えた俺はゆっくりと座り、コーヒーを飲んで落ち

着くことにした。

苛立つごとにコーヒーを飲むため、だいぶ胃が荒れてきている。

普段だったら、俺が気を聞かせてミルクを入れたり、軽くつまめるものを用意

してくれたりするのだが、肝心の彼女の行方が分からない。

これじゃあ、まるで俺のほぅが子供だな。

母親が見つからないというように部屋という部屋を探し、ドアというドアを

すべて開け放ってしまった。俺が倒れてから、少し出掛けるだけでも心配する

俺に気を遣い、必ず連絡をしてくれていたのでこんな事は初めてだった。

そもそもどうして僕はあんなにも、俺が仕事に行くのを嫌がっていたのだろ

う？別段、普段と変わったところがあったようには、思えなかったのだが…。

いつも僕は俺が仕事に行ったあとは一人のはずだ。

だが、それを今更嫌がるとは考えがたい。

どうして今日なのだろう？

昨日の時点では、休暇という事でむしろ機嫌がいくらいだった。

そして朝起きてからも、心当たりと言えるものが思いつかない。

…にも関わらず俺が家を出る前の僕は、まるで何かたまっていたものが流れ

出したように感情を爆発させていた。

そう、それは無理矢理せきとめられた水が流れ出すような…。

俺の中で、一つの疑問が浮かんだ。

無理矢理せき止められていた？

僕は俺の仕事を理解していたのではなく、無理に感情を押し止めていたのか？

「いや、そんな訳がないと」いう思いが始めに浮かんで来たが、ではなぜ突然僕が

黙って家を出、帰ってこないのかという考えが邪魔をする。

そもそも…そんな訳がないなどと、どうして俺は今まで疑うこと無く信じる事が出来たのだろう。

疑問が浮かびだすときりがない…。
鍵を持って、俺は走り出していた。

儂 。 はかな、儂、儂。

お前はどこにいるんだ？
いつ家を出て…。いや、いつ俺の前から居なくなっていたんだ？
儂、逢いたい。

4・千慮の一失（後書き）

最後の部分の解説をいたしますと、かつ暁は、ようやく儚の心の叫びとシグナルを見逃していたという事に気付いたのです。

本文中に説明できたらいいのですが、稚拙な文ですみません。

5・静かな咆哮（前書き）

タイトルに違和感を感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、すみませんわざとです。相反する感情に苦しむ姿が好きなので、少しでも伝われば嬉しいです。

5・静かな咆哮

何時間も色々なところを探し回った。

走っても走っても、夢との距離がどんどん離れていくようで、寒空の下

俺は汗をかきながら、気が狂いそうだった。

夢がみつからないという事実のほかに、どんどん俺と彼女の関係が穴だらけだと

いう事に気付いてしまったのだ。

夢の知り合いなどしらない…。

前の職場に一人くらい親しい人間がいても不思議はないし、学生時代の友人

だっているだろう。同棲までしていたのに、彼女の友人すら俺は知らなかったのだ。

親しい親族もない彼女には、両親が亡くなってからは頼れる親戚もない

はずだ。そうになると、俺が彼女の親しいものに連絡を取ることはいらない。

……一人で探すしかない、早々に諦めるほかなかった。

走りながら、儂といつたいろいろな場所を思い出そうとした。
初めて出逢った場所や、デートした場所。さまざまな場所が頭をめぐった。

しかしそのどれも、彼女が行きそうだとピンとくる箇所はなかった。人ごみを嫌う彼女とは、極力落ち着ける場所を選んでデートを重ねていた。

何処どこもそれなりに喜んではいたが「一緒に暮らそうと」「いった時ほど顔を

輝かせてくれたことは無かった。

二十代前半という事もあり、まだまだ甘えたい盛りだろうに儂は、俺に対して必要

以上に頼ることは無かった。

女性、特に彼女に奢ったり贈り物をするのは当たり前になっていた俺に対し、初めて

のデートでお金はきちんとしたいのだと怒られた時は驚いた。

大人しい儂がはつきり考えを口にするだけでも珍しいのに、十歳近く年下である儂に

怒られた時は少し嬉しく感じましたが、年の差は遠慮につながっていたようだ。

俺にとつたらそんな彼女が可愛くてしょうがなかった。

不器用で、甘え下手で臆病な儂のことが、愛しくてしょうがなかったのだ。

今まで感じたことのない安らぎも、彼女とだから得られた。他人と暮らすことなど

考えた事もない過去の俺からしたら、驚くべきだろう。

そのうえ自ら進んで同棲するとは、予想もつかなかった。

二人きりの時に見せる笑顔が好きで、同棲しだしてからは進んで彼女を連れ出そう

ともしていなかった。精神的ストレスで前の職場を辞めた彼女は、前にもまして人が

多い場所を怖がっていた。そんな彼女の反応に甘え、俺は夢の心の問題を解決しよう

とも考えていなかった…。その為、心の底から笑っていた場所を思い浮かべられずにいた。

今考えてみると、夢が本当に好きだった場所は、俺たちの家じゃないのか…？

俺の家に彼女が越してくるといふ形だったが、思いのほか気に入って貰えたようで、

安心して眠っている姿に、一人癒されることも多かった。

彼女はよく眠るので、二人でいる時も寝ていることがたびたびある。

その癖、においや気配に敏感で、俺が動いたりするとすぐさま反応した。

まだ同棲しだす前に、以前に付き合っていた女性がよりを戻したいとやってきた

事があった。男と別れたばかりだとかで、新しい金づるが欲しかったのだらう。

やけに体を密着させ、俺との待ち合わせぎりぎりまで粘られた。最終的には、あまりのしつこさに嫌気がさして、タクシーを使い適当にまいたが会社まで来るような

非常識な人間だとは思いつかなかった。俺と出逢うまでは軽く、大人の関係しかしてこなかった俺からしたら、随分な選択ミスだったと後悔した。

やっと俺と逢えたと安心した途端、彼女は眉をひそめ、機嫌が悪くなったのには

空恐ろしいものを感じた。そこまできつい香水をつけている訳ではない、元彼女の香りにすぐさま気がついたのだ。

しかも乗ったタクシーの運転手はヘビースモーカーらしく、煙草の匂いがすごかつ

た。それにも拘らずかすかな香水を嗅ぎ分けた俺に苦笑するとともに、この娘と

一緒にいたいと感じている限り、絶対に浮気などできないと確信したほどだ。

「……そうだ」

俺は、儂の事を大切に感じている。

彼女を逃したら、次は無いだろうというほど溺れている。

彼女は10近く若いのだから、その気になりさえすれば新しい相手などいくらでも見つかるだろう。

しかし、儂を幸せにするのは俺がいい。誰にも譲りたくない。

絶対に見つけなければ。

5・静かな咆哮（後書き）

タクシー内での喫煙の描写が出てきますが、これは数年前の設定という事なので生温かい目で見えてやって下さい。

6・砕氷

早く見つけなければ…。

その気持ちだけで、街中をかけずり回った。さすがにここまで来ることは無いかと考えるながらも、足をとめることなど出来なかった。

俺の愛しい、儂

人ごみの中で一瞬見なれた姿を見つけた気がして、必死に目を凝らす。

「…は、かな？」

うわごとのようにつぶやいた後、身体中が歓喜に震えた。たしかに儂の後姿だ。

嗚呼、やっぱり彼女だ。

彼女しかいないのだ。

どんなに遠くに逃げたとしても、追いかけるし見つけてしまう。運命などと甘ったるい言葉を遣う気はないが、これは決められた事なのだ。

人をかき分け、夢の腕をとる。その身体は思ったよりも軽く、勢いが強すぎたとも言うように、彼女がよるめいた。

「。。。」

夢：は、夢はこんなにも危うかったのだろうか？

元より身長は小さいほうだったが、それほど痩せすぎている訳ではなかった。

何よりも目が

何よりも目が生気をなくしているのである。

先ほど興奮していたのが嘘みたい、俺は心細くなってきた。

彼女がこんな状態になったのには、少なからず俺が関係しているはずなのだ。

「夢？」

どうしたの、何処に行こうとしてたの？」

俺は動揺を隠すかのように、優しく問いかけた。同棲していながら、これだけ

変わっている彼女の体にすら気付いていなかった事がショックだった

た。

しかし夢の口から出てきたのは、予想外のことばだった。

「わったし…？あのね、かつきを探しに行くの。

また私、置いて行かれちゃったの…」

どうしてもいやだって言ったのになあと、子どものようにつぶやく彼女にかける

言葉が見つけれなかった。

黙り込んだ俺を気にすることなく、夢は続ける。

「でもね？今度はもういやだから…。かつきだけは失いたくないからね、追いかけて

いくことにしたの」

…俺を？

夢は俺をさがしに行くと言っているのか？

これが夢だけが呼ぶ、彼女がつけた俺の呼び名だと分かってはいるが、認めたく

なかった。その想いと裏腹に、わかってしまった。

そうか…。夢は一人でいても大丈夫だったのかもしれない。
でも…。独りになることはたまたまなく怖かったんだな。

人間付き合いが苦手で、両親を亡くして久しい若い女の子が、あんなに聞き分けよく出来る筈がなかったのだ。臆病な彼女は、知らず知らずのうちに俺が抱いていた夢の理想像に沿おうと必死だったのかもしれない。

そんな事をしなくても好きなのに…。
そうは思うが、好きだという言葉はおるか、この気持ちを具体的に伝えたことすら
無い俺に、責める権利などありはしないだろう。

夢はいまだに、俺を…。
かつきを壊れた瞳で見つめていた。

7・愚か者の戯言（前書き）

お、お久しぶりです（汗）

次は、僕の視点になりしばらく続きます。

7・愚か者の戯言

出逢ってから、かつきはずっと優しくかった。

彼と会ったのは両親を亡くしたばかりで、一人でもまともに生きていかなければと気負っていたころだった。

あの頃は、何処からが甘えなのかが分からなくて、人と一線置くようになって

いた。今でも、甘えるのは下手だけれど、当時は現在の比じゃなかった。

まるで手負いの獣のように、人になるべく近づかないようにしていた。

あのころを振り返ってみると、親しくなった人を失うのが怖かったのだと思う。

いともたやすく、私の前からいなくなった両親。どうして一緒に連れて逝ってくれなかったのかと、聞かれたらどやされそうな事を四六時中考えていた。

…生きている実感がなかった。

特に楽しみもなく、日々の生活費を稼ぐために慣れない仕事をして

…。

へこたれている場合じゃないと、両親に恥じない生き方をするのだ
という考えは

あったけれど、心がどうしてもついて行かなかった。

駄目なのだ。

どんなにがむしゃらになっても、埋められない穴が淋しくて、悲し
くて…。

人と距離を置くようになった私には、こんな胸の内を話せる友人も
いなかった。

そんな私に力を取り戻させてくれたのが、かつきだった。

かつきと初めて会ったのは、私が勤めている会社の近くの公園でお
昼を取って
いる時だ。

極力お金を遣わないようにしていた私は、毎日お弁当を持参してい
たため混み
合った社員食堂でご飯を食べるのを申し訳なく感じていた。入社当
初こそ、

数少ない同期の人間に付き合っ
て食堂で食べていたが、あまりの混
みように一緒
に食べるのを遠慮するようになった。

実際、高校卒業と共に働き始めた私には、大学を卒業した人たちはとても大人に見え、お互いに気まずさを感じていた。

溜め息をつきながら、食欲は無いが口にお弁当を運ぶ。

…両親がいなくなってから、食欲が減った。

忙しくて、まともにご飯が食べる時間がなかったし。常に次のことや、見えない

将来の事を考えながら一人で食べる食事は、苦痛だった。

昔はダイエツトしたくても、つついとお菓子に手を出してからかわれていたのに…。

嗚呼、駄目だ。過去を思い出しては涙が出る。

人は少ないが、外で泣くわけにはいかない。

誰に見られているか分からないし、へ々に慰められるのも嫌いだ。

大丈夫かと聞かれても、嘘をつくしかないし。

むしろ大丈夫に貴方には見えるのですか？大丈夫な訳がないでしょう！と、八つ

当たりしたくなる。そして、優しくしてくれた人にまで、そんな態度をとってしまった

そんな自分が嫌いでしょうがなかった。

ようは臆病なだけなのだ。

人に心の内を明かすのも、涙を見せるのも怖くてたまらない。意気地がないから、近づいてきた人を牽制する。

それでも、事情を知った人が可哀想な人間を見る目で見てくる事が耐えられなかった。

『…ねえ、知らないの？』

可哀想っていうのはね、自分より目下の者に使う言葉なのよ。

だからね、貴方が憐みのつもりで使っているその言葉は、何よりも私を馬鹿にしているし、

馬鹿にしていると公言しているようなものなのよ。』

いつか見た映画の、女優のセリフが頭に浮かんでいた…。

8・親切ごかし(前書き)

きりのよさ重視で区切ってしまいましたので、今回短く次回長くなります。

8・親切ごかし

「君、さっきからそうしているけどお弁当はやく食べないと、そろそろ時間

大丈夫？」

ボケっとしていた私に、明らかに年上の男性が話しかけてきた。それがかつきだった。

彼の声に反応して、時計を見てみたら、残り15分近くになっていた。ここからならすぐ会社に戻るが、10分前には席につきたい私には、ぎりぎりの時間だった。

…しょうがない、お昼は諦めよう。

まだ半分も食べていなかったが、遅れないことのほうが重要だ。

そう思っつて、少し溜め息を吐きつつ片付けようとするがかつきに止められてしまった。

「そんなに残っているのに、食べないと体持たないぞ。それに家に帰る頃には悪く

なって食べらなくなるだろうしもったいないよ」

それは正論だが、こちらにはこちらの事情があるのだ。

天涯孤独の身の私を雇ってくれたのはここだけだったし、学歴も資格もない私を今更

雇ってくれるまともな会社などないであろう。

それに入社して一年目の私に、皆さん優しくしてくれている。

特に、私の指導をしてくれている先輩は、細かい部分まで説明してくれて分かりやすい。

女性でも立派に仕事をしていて、男の人たちに負けていない。私の憧れの先輩だ。

そんな先輩に認められたいという気持ちもあり、少しでも仕事を頑張りたい。

「…もう時間ですので」

つい仕事口調で返し、なぜか隣に座ってしまった人と目を合わせないように立ち去ろうとしたのに、かつきはしつこかった。

「君、その制服だと〇〇商事の子だろ？」

だったら、まだ時間はあるじゃないか。ギリギリの所までいいから食べなさい」

「…分かりました」

さすがに、会社まで知られていると断りにくい。

確かに残したらもつたいないし、もう少しだけでも頑張ろう。

もそもそと食べ始めた私を横目に、どこか満足そうにかつきはパンを開けて食べ

始めた。：人に説教をしているくせに、自分はパンなんですね。少し恨めしくなり

ジトつとした目線を送る。そんな私に気付いているのかいないのか、

彼は美味しそう

に菓子パンをほおばっていた。

なんだか変な人に捕まったな…。

私がかつきに出逢った時の感想はそれだった。

9・身から出た錆？（前書き）

思ったより夢がよく動いて、困惑している作者がいます。

本来一話で終わらせようとしていたのに、暁（かつき）が絡んだことにより余計に長く（汗）。

また、傍視点でしばらく内容自体は進みませんが、宜しければお付き合ってくださいませ。

9・身から出た錆？

不思議なおせっかい男に会ってから、まさか説教をするためにまた来ることは

無いと考えていたのだが、甘かったようだ。その証拠に、初めて会った翌日も同じ

公園でお弁当を食べていたら何が楽しいのかまた、かつきが近づいてきたのだ。

あれからほぼ毎日やってくるため、正直困惑していた。

会いたくなければ場所を変えればいいのだけれど噴水が目の前にあるここは適度に

涼しくて気に入っている為、どうしても離れがたい。

何より、それでは私が負けたようで悔しいという気持ちもあった。

せめて彼のほうが近づいて来ないでくれれば楽なのに、変な生き物に懐かれた気分だ。

「おつ、今日もおいしそうな弁当だね

ただ、少なすぎないか？俺だとその弁当5、6個いけそうだ」

カラカラと笑いながら、彼はかつきはまたパンを食べていた。

コンビニの袋なのだしパン以外も買えばいいのに……。つい口に出していたのか

かつきに初めて言われたとまた笑われてしまった。いや、何故そこ

で笑うのか
分からないのだけど。

「俺はいつ飯にありつけるか分からないから、どこでもすぐ食べれる物を選んじや

うんだよ。その上、社食や定食屋とかも時間がないと混んでて面倒だし」

そんなに忙しいのだろうか？

ただ、何故か言い訳のように感じてしまうのだが。

せめて、総菜パンとかにすればちょっとは違うだろうに、いつも彼が持っているのは

菓子パンなどのほとんど野菜のないものばかりだ。

甘党だとしても、これが毎日だと糖分を取り過ぎているだろう。

「もしかして、野菜苦手なんですか？」

「……」

私が問いかけた途端びくつと彼は体を震わせ、表情も固まっていたから当たりなの

だろう。それにしても、分かりやすすぎる。。

はあーっと溜め息をつき、私はおもむろに野菜の肉巻きを差し出した。

「いつ、いや別に嫌いなわけじゃないから…」

「人にはきちんと食べると言いながら、自分は偏食ですか？」

言外に、四の五の言わず食べると伝える。

顔が思いつき引きつっているが、私の知ったことか。

おせっかいを先に始めたのはそちらが先だ。

しづしづと口を運んだ彼の瞳が、驚きに見開かれたのにひっそり満足しながら、

自分の食を進める。

私の母はなかなか料理がうまく、特におしゃれな料理を作る訳ではなかったが、

ありがたいことに私が好き嫌いをしない位には料理上手だった。ゲテモノや見た目が頂けない料理以外は、たいてい食べれる。

…まあ、だからこそ食に関心を持っていないのかもしれないが。

あの時は、家族で和気あいあいと食べていたからおいしかったのだ。

私も、そんな料理上手な母の技を少しながら教えてもらっているの
で、この肉巻き
には自信があった。

「う、うまい！野菜なのにうまいなんてありえない」

そんな事を考えていると、どれだけ野菜嫌いなんだと言いたくなる
セリフが聞こえて

きた。その上、「こんなうまいものを残すなんてありえない」と言

つた後、ほうれん草
を巻いた、卵焼きを勝手に食べた。人にご飯を食べると言いな
がら、奪わないで
いただきたい。

普段はそこまで騒がしくないのに、わあーわあー言っている彼にま
た溜め息が出る。

…静かなのが好きなのに、彼と話してから家に帰って夕ご飯を
食べるのが、
前より辛くなつた気がする。

聞いた話だが、彼は私の会社と近いところで働いている上に、取引
先ということでは何かと

私の会社でも顔が知れているようだ。それで何が悪いって、女性た
ちの目が厳しくなる
のが怖いのだ。私は無関係だと言いたいのだが、こんな風に二人っ
きりでご飯を食べて
いたら、否定しても聞いてくれないだろう。

女の子は怖いのだ。
たとえ男性から寄って来ていても、きちんと断らなければ「実は気
があるんじゃない
か」と言われ牽制をしていないとすぐに「調子に乗っていると」「言わ
れる。」

幸い、その手のことでいじめられるようなことは無かったが、女性
がいれば必ずそういう
事は起こる。しかも、聞いた話の中には彼を狙っている人がうちの
会社でもいるのだと

言うから油断はしないに限るだろう。

そんな事を考え出すと端に座っていたベンチを、さらに端に移動してしまふ。

私の気も知らず「また料理食わしてねと」笑う彼に、自分でお節介を働いてしまった

とは言え、若干の怒りを感じずにはいられなかった。

9・身から出た錆？（後書き）

僕は、結構世話焼きでしっかりしている子です。

その為、お節介にお節介を返しただけのつもりでしたが、思わぬ墓穴を掘ってしまったことに気が付き、へこんでます。

10・天邪鬼の主張（前書き）

連載当初からお付き合いいただいている方、新しく興味を持っていただいている方、本当にありがとうございます。

10・天邪鬼の主張

一つだけ、言わせてほしい。

この世には、男性の心をつかむにはまず胃袋から！という言葉があるが、断じて

私はそんな事を狙って彼に、おかずを分け与えた訳ではない。

本当に、珍獣を手懐けている気分なので、未だに彼にかまわれている事は不測の

事態なのだと言張りたい。最初は本当に、つい興味本位で野良猫に餌を与えて

しまったくらいの気持ちだったのだ。

もし皆さんがこの立場をうらやましがらるのなら、ぜひ変わって差し上げたいし、

私をいちいち睨んでいくお姉さま方に、片っ端から事情を説明して歩きたい位だ。

けれど、明らかに彼と吊りあってない私たちの関係は、周りから見たら『若さだけを

武器に彼に迫っている勘違い女と、心優しい男性』というものになってしまう。

彼に気のある女性から言われるならまだしも、何も知らない男性社員からもうまく

取り入っている女だと言われているのには正直堪えた。

いつ、私がそんなものを欲しがったというのだろう。

私はただ、目立たず穏やかに生活したかっただけなのに、それはそんなにいけな

かったのだろうか。安定や安穩を望む事が、罪なの？

それとも、碌ろくな学歴も実力もない人間は、お偉いエリート様に近づくことすら

罪だというのだろうか。

自分の思考が卑屈だという事を、私は知っていた。

だから、最上もがみ暁という男性に声をかけられる事も、女性として喜ばしく

感じるよりも、面倒だという気持ち先立つ。

彼に氣遣われることで、余分な敵が10人は軽く出来ている。

その事は「なるべく波風立てず、目立ちたくないと」考えている私にとつたら、

煩わしさしかないのだ。

いくら女として間違っているとわれようと、その考えを変える気はなかった。

これ以上、敵を増やしたくはないから、せめて彼の優しさに甘える事のない様に

と、いつも心がけていた。

結局、私は自分の身が可愛いのだ。こんなとろい癖に変なところで強かになる

女に好かれても、彼にとつても迷惑なだけだろう。だから、少し距離を置いている

知り合い程度の今の関係が一番よいのだと考えていた。

それなのに、目の前で倒れられたかつきが倒れたのを境に、
私は自分の心
と向き合わざるおえなくなってしまった。

11・心の隅に見る（前書き）

おかしい…。

書き始めた当初、私の頭の中で儂はその名前に合つくらい、ふわふわしたイメージの女の子だったのに、ただのマイナス思考まっしぐらの子になりつつある気がします（泣）。

11・心の隅に発見する

その日、私は珍しく仕事が立て込んで残業で帰るのが遅くなっていた。

会社から出た時、ふといつもの公園に目を向けると、かつきがベンチに座っているのが見えた。

当時、かつきと出会ってから一年ほどたっており、私は彼と話す時間を楽しみ

だしていた。勿論まだ、一線引いて接するようにはしていたが、年上の友人が出来たようで嬉しかった。

仕事の覚えが悪い私は、かつきのことを差し引いても先輩方にとまれていた。

一番仲良くしてくれるのは、新人の時に面倒を見てくれた晋川先輩しんかわで、あの頃と

変わらずに優しく、けれどキチンと教育してくれている。私は彼女を今でも目標としていた。

本当は、二年目ともなれば、一人で色々さばかなければいけないのに、未だに高卒だから、若いからといった理由で上司に許してもらっている部分がある私

が気に入らないという思いも先輩方にはあるのだろう。

確かにそうだ。

私だって、若いだけで目に見えて差別されたら嫌だ。

だから、少しでも仕事に慣れようと頑張っているのだが、頑張りが空回りして

いる事のほうが多い。不器用だということは理由にならないのに、どこかで周囲に

甘えてしまっている自分が嫌でたまらなかった。

だからこそ余計に、かつきを受け入れ始めている自分にすら苛立ちが隠せない。

今だって、かつきの姿をみつけてほんの少し喜んだのだ。

仕事と私的な人間関係を同じ土俵で考えるのは間違っていると思う。

それでも、ただでさえ臆病で不器用な私が、こんなに人間関係に影響が出て

いて、普段通りに出来るわけがないのだ。『逢えると嬉しいけど、会いたくない』

それが私の本心だった。いや、本心だと思いこもって考えていた。

そんな考えに囚われ立ったまま考え込む私の目の端で、かつ

きの体がグラリと

傾くのが分かった。

一瞬にして頭が冷えた。

それが会社の前だという事も忘れ、私は救急車を呼んで病院に着いてからも

ずっとかつきに付き添っていた。

彼の名前のほかに、何かを必死に叫んでいた気がするけどよく覚えていない。

あの時は、ひたすら彼を失うという恐怖に覆われてまともな判断が出来ていなかった。

また、身近な人を失うなんて耐えられなかった。

両親を失ったのも一瞬で、唯々悲しみと孤独感に包まれた感じを、今でもはっ

きり思い浮かべる事が出来る。このように、両親の事を過去形で語れるのが

かつきのお陰なのだと心のどこかで気づいていた。

彼に、異性として惹かれているなんて認めたくなくて、これ以上踏み込まれたく

なくて必死だった。

…だって、失うのは一瞬なのだ。

家族でさえいなくなったのに、どうして出逢ったばかりの赤の他人が傍にいて

くれるだなんて自惚れられるだろう。

信じていないのかと聞かれたら、私は何も答えられない。

ただ、かつきや他の人を信じていないというよりも、自分にそれだけの魅力が

あると信じる事が出来ないのだ。

努力をする気持ちも歩み寄る気持ちもあるけれど、ずっと一緒にいたら、

何時かとんでもないドジをおかしたり、様々な事に対する不安から辛く当たる

かもしれない。

彼らの問題ではない。

私が、わたし自身がこわいのだ…。

今度悲しみや苦しみにのみこまれたら、自分を見失ってしまうのではないかと

怖くてたまらなかった。エゴだと言われようと、私は好きな人たちを傷つける

のが怖くてたまらない臆病ものだ。

かつきが倒れなければ、そんなことにも気付けない自分が情けなくて、

私は彼が目を覚ますまで、病院のロビーですっと泣いていた。

11・心の隅に発見する（後書き）

自覚なんてしなくなかった。

出来たら、このまま友達として傍にいたかった。

それなのに、意気地がない私に、神様は業を煮やしたのですか？

今更彼を失うくらいなら、ずっと一人でいた方が良かったですのに…

12・きけばきくほど涙出る(前書き)

都々逸「おろすわさびと恋路の意見、きけばきくほど涙出る」(詠
み人知らず)より

12・きけばきくほど涙出る

点滴が、音もなく落ちている。

かつきが倒れたのは、過労と軽い栄養不足だったらしい。夏も近づき、食欲が

落ちていた時に、ろくに食事もとらず働き通しだったそうだ。

なんてはた迷惑な人なのだと憤るより、最近合わないことにホッとしていた

自分にいら立った。

そうだ。彼は、私が出会う前からあの公園で食事をしていらしいのだから、

まともな食事をしていないのではないかと察してもいいはずなのに。

私は、唯々彼と会わないことで、余分なうわさが出ない事にホッとしていたのだ。

彼と話すことで救われていたはずなのに、なんて身勝手な人間だ。

申し訳なくて顔向けできないと考えていたのに、かつきは目が覚めた途端に私がいると知って、自分が寝てるベッドまで私を呼びつけた。

確かに、帰る事も出来ずにうろうろしていたが、少しやつれた顔で「こんな遅く

まで出歩いていて大丈夫かと「氣遣わないでもいいじゃないか。人前で泣いた事なんて、ほとんどなかったのに病人に慰められるほど、頼りなく見えているのかと思うと情けなくて。それとともに普段通りの彼が嬉しくて、私はまた号泣してしまった。

点滴が終わって、しばらく安静にしたら帰ってもいいと言われたので、タクシーを呼んで彼を家まで送って行った。本当は身の回りの世話をしたいくらいだったのだけれど、「もう遅いから」と言って帰されてしまった。とりあえず、部屋に入るのを見届けてから待たせていたタクシーに乗り込む。

幸い、明日は土曜日だ。彼もゆっくり休めることだろう。…だが、栄養不足で倒れた野菜嫌いの人間が、まともな食事を一人でも取れるのだろうか？しかも、自炊はほとんどしないという事だから、食材もないだろう。良くて店屋物が…。

駄目だ。

一度好きだと自覚したら、お節介だと分かっているても、何かしてあげたくてしょうがない。

彼女はいないと自分で言っていたし、明日様子見がてらにお弁当と差し入れを持つ

ていつてもいいだろうか？

散々、人のおかずを横取りしていたのだから、今更手作りは気持ち悪いなどと言わ

れないと思う。だが、彼女とはち合わせたら気まずいし、迷惑がられたら、立ち

直れない気がする。

彼氏なんて、高校の頃にほんの数カ月ただけで、10歳近く年上の男性に対する

行動なんてわからない。

大人の付き合いなんて、した事もないのだ。

迷惑ではないかと、部屋に案内される寸前まで考えながら、私は翌日かつきの家を訪れた。

?
?
?
?
?
?
?
?
?

その日に、勇気を出して告白してからは、しばらく夢のような日々だった。

いき過ぎと言えるお節介も、私の告白も彼は受け入れてくれたのだ。

かつきは、
それからさらに優しくなったし、やはり女の子の扱いにも慣れてい
た。多少、
嫉妬心が湧きはしたけれど、これが普通なのだろう。

私にしたら、初めての恋と言っていい彼との関係。

今までの一線置いていた関係から、少し近づいて……。両親が亡くな
ってから、

初めて頼れる人を得たことに安堵していた。年近い友達とは違う目
線。苦手

だったパソコンも、かつきに教わることでだいぶ使いこなせるよう
になり、任せ
られる仕事も増えだした。

全てがうまくいっていると考えていた。

彼女に、あんな言葉を言われるまでは。

12・きけばきくほど涙出る(後書き)

とりあえず、僕の回想はここで終わります。

次は暁(かつき)目線で話を進められると思いますので、
もう少々お付き合ってください。

13・君の名を呼ぶ

人通りの多い街中で、俺は儂の腕をつかんだまま黙って立ち尽くしていた。

虚ろな瞳で俺をみつめる儂に、どんな言葉をかければいいのか分からず数分が経ち、

そろそろ寒くなってきた。

どれだけ儂は一人、寒空の下にいたのだろうか…。

白い肌が青白く見え、俺よりずいぶん冷えているようだった。

「儂。ここは寒いから、一回家に帰ろう？」

儂は家、好きだろう？」

流石にこのままでは、風邪をひいてしまう。

話し合うにしても、一度家に帰って温まらなければまずいだろう。

人ごみが苦手な儂のことだ。俺はそう言えばこれで彼女がすぐにならずと考えていた。

…しかし予想に反して、儂は今にも泣き出しそうな顔をした。

「だって。かつきが…いないの。」

はやく探さないと、かつきが遠くに行っちゃっよ」「

そう、囁くような声で彼女は呟いた。

嗚呼、どうして俺は夢をこんなにも不安にさせてしまったんだろう。

自分の馬鹿さ加減に嫌気がさした。

きっと倒れた時から…嫌もしかしたらその前から、夢はずっとひとり深い闇で

溺れていたんだろう。

あれだけ近くにいたのに、それに全く気付く事すら出来なかった。

「それにね…かつぎが居ない家に、帰るのが恐いの」

そういうと、彼女は今までの様子が一変し、手で顔を覆って泣きだした。

今まで虚ろに見えていたのが嘘のように、声を押し殺して泣く姿に胸が詰まる。

気がつく俺は、彼女を力いっぱい抱きしめていた。

こんなにもきつく弱弱い様子の夢を抱きしめていたら、苦しいだろうことは分かっ

ていても、腕の力を緩めることが出来なかった。

まるでこのまま彼女を自由にしてしまうと、二度と元には戻らなくなりそうで

怖くて怖くて堪らなかった。

「夢のことが…好きだよ」

いつもだつたら滅多に口にしない事を言った。
照れからくる戸惑いで、普段気持ちを伝えようとしなかったのが悔
やまれる。

儂が好きだよ

儂が大切だよ、傍にいたいよ、守りたいんだよ

俺は大切なことを、今まで一度も伝えてこなかったのだ。

言葉を尽くしても伝わる事など高たかが知れているのに、言葉にしない
でも分かって

もらえるだなんて、思いこみでしかない。

ごめん儂。これからはちゃんと伝えるから、儂も思っている事を教
えてよ…。

「儂、ねえ儂。俺の声をちゃんと聞いて。

俺の事をちゃんと見てよ。儂のこと…愛してるんだよ。

どこにも行かないで、ずっと一緒にいてよ」

俺は自分でも気付かないうちに、涙をこぼしていた。

13・君の名を呼ぶ（後書き）

昔に書いたものを手直ししているのですが、やけにこの作品は主人公の名前を多用しすぎている気がしてしょうがありません。

目につるさくならないように気を付けますので、もう少々お付き合ってください。

14・愛しき思い出の場所（前書き）

すみません、前回と比べると今回は異様に長いです。

14・愛しき思い出の場所

人ごみの中で、何をやっているんだという気持ちはあるが、抑える事が出来なかった。

…しかし、本格的に夜が深くなってきた。

こんなにふらふらの状態の儂を、いつまでも冷たい風にさらしておく訳にはいかない。

儂の手を強く握りしめたまま、タクシーを拾って乗り込んだ。

此処からなら、家まで少しかかるだろう。

「儂、ちょっとでもいいから寝てな」

どこかぎこちない様子の儂の頭を、俺の肩にもたれさせる。

甘えるのが下手な儂は、こんな行動も戸惑うようで最初はどこか力が入っていた。

けれど、さすがに疲れたのだろう。しばらくすると寝息が聞こえてきた。

肩にかかる体重が心地よい。

まるで俺を信用しているのだと、言葉なく伝えてくれているようだ。

だが、それで満足している場合ではない。

家に帰ったら、儂としっかり話し合うのだ。そして、出来ればもっと頼ってもらえる

様にならなければ、彼女とこの先ずっと共にいる事は難しいだろう。

?
?
?
?
?
?
?

「風邪ひいたら大変だから、まずは風呂に入っておいで」

俺のことを考え風呂に入るのを渋っていた儂を、無理に風呂へ入れた。

優しいのは分かるが、自分より冷えている彼女をそのままに出来る訳がない。

自分を優先させることに戸惑うのはしょうがないが、これから慣れてもらおう

他ないだろう。

汗ばんだ服をそのままに、俺は煙草をふかし始めた。

別段意識した訳ではないのに、普段通り換気扇の下にいた。

儂は喉が弱く、煙草の煙が苦手だ。

その為、特に注意された訳ではないのだが、彼女が家にいるときはこの場所か俺の

書斎で吸うと決めていた。今では、台所に俺専用と化した椅子が一脚置かれている。

祖父母から貰いつけたと言っても、新しい物好きな祖母はこの家の至る所に洋風の物を取り入れていた。その一つとして、台所の床はフローリングにしており、足の長い椅子を置いていても違和感がなかった。

一見、統一性がないと思えるこの家が、俺は気に入っていた。おばあちゃんツ子だった俺は、ことあるごとにこの家に来ていた。寡黙な祖父に比べ、明るく話し好きな祖母はとても喜び、甘やかしてくれた。思春期に突入しても、この家では突っかからずに接することが出来た。

しかし、そんな穏やかで優しい雰囲気は、祖父が亡くなったことで変わってしまった。

た。もともと、祖父自身も煙草を吸っていたのでかなり体が悪くなっていたようで、風邪をひいたことをきっかけに呆気なく逝ってしまった。

亡くなったと連絡を受けてすぐこの家に向かうと、祖母は祖父の頭を愛おしげに

なでていた。「全く、最期までいうこと聞かないんだからと」どこか淋しそうに

愚痴っていた祖母の姿が、今でも忘れられない…。

その翌年、祖母は夫の後を追うように、静か亡くなった。

悲しくも愛おしい思い出の詰まった、この家を譲り受けられると知った時は、本当に

嬉しかった。「私の次に、この家と思い出を大切にしてくれるのは、
暁くんだからと」
祖母が言い遺してくれたのだ。

この家が俺の物になってから、今まで親類以外を入れたことはない。
どんなに親しい友人でも、この家に招き入れることは出来なかった
のだ。

祖父母との思い出が沢山詰まったこの場所で、新たな思い出を積み
重ねる勇気が
なかった。まるで、そうすると二人のことも思い出も消えてしまう
のではないかと、
怯えていたのだ。

そんな中、夢に出会った。

彼女なら共にこの家を愛し、穏やかな思い出を一緒につくっていけ
ると感じたのだ。

けれど、この家に夢を初めて招いた時は、柄にもなく緊張していた。

この優しい思い出の沢山つまった家は、夢の傷ついた心を癒やすの
に最適だと勝手に
突っ走ってしまったが、夢の意志をギリギリまで確かめていなかっ
た。

予想通り、同棲しようと言った時に夢は「そこまで甘えられないと」
拒否し、同棲生活が

始まってからも遠慮がちだったが、1ヶ月もたてば馴染んでくれている
のがわかり心の底から
嬉しかった。

この先、もし夢を失うようなことになったら、俺もあの時の祖母のようになるの

だろうか…。

そんな事を考えていると、汗で冷やされた体が異常につめたく感じた。

14・愛しき思い出の場所（後書き）

お付き合いいただき、ありがとうございました。

15・アルカイトクな微笑（前書き）

今回は夢目線を入れさせていただきます。

15・アルカイツクな微笑

湯船に浸かりながら、儂はボーっとしていた。

この家のお風呂はかつきのおじい様がこだわったものらしく、檜ひのきでつくら

れている。儂にとつたら、出かけでもしない限り縁がないものに、いつもお世話になっなっているのだ。

その為、初めてこのお風呂に入った時はあまりの心地よさについ長湯ながゆしてしまい、危あやうくかつきにお風呂場まで乗り込まれそうになってしまった。懐なつかかしいことを思い出して、くすくと笑う。

お風呂に入っていると、様々な事が断続的に浮かんでは消える。

正直、かつきが私の前で泣いたのは初めてだったため、さっきは驚いた。彼が仕事のたために家を出てからの記憶があいまいで、気がつくとかつきの腕の中にいたのだ。

普段、憎にくたらしいほど年上という体勢を崩さない彼の涙を見たのは、あれが初めてだった。

彼と手をつなぎながらこの家に帰ってきた時には、思わずほっと安心してしまった。
はじめ、この家がかつき名義のものだと知った時は驚いた。たやすく家一軒を自分の物に出来るほどお金持なのかと、自分との差を意識してしまったのに、今となつてはすっかり落ち着ける場所になっていた。

家の事を聞いた時、一瞬ひいてしまったのが分かったのだろう。言い難いだろうに、亡くなつた彼のおじいさんとおばあさんの話を私に聞かせてくれた。彼はいつでも大人の対応で優しい。

…ただ残酷なことに、それさえも私たちの年の差を見せつけられている気がした。
もともと年がひらいていることを気にしていたのに、身分差の様なものまであつたら、彼と今までどおりに付き合っていける自信がなかった。
お金持ちだからと言って友達を差別したことなどなかったのに…。確かに私は、あのときに怖気づいたのだ…。

同棲しだしたのは、仕事にもだいが慣れ、せっかく彼の隣にいる自信を持ってそんな時のことだった。

私が倒れたことで彼に甘えるようにして同棲することになり、仕事まで止めることになった。今までどおりでいいのだとかつきは言ってくれたけど、確かに私たちの関係は変わるだろう。というより、引け目を感じずにいられる訳はない。

仕事をしていない私に生活費を全て折半するのはつらいし、貯金などを切り崩そうとしても「後の為にとっておけと」かつきに断られてしまうのだ。

彼が優しいのは知っているし嬉しいけれど、結婚している訳でもないのかつきに養われているようなこの状況は嫌なのに…。そう思っていないながら結局は甘えているのだから、これまでひとり頑張ってきたことすら無かったことにされそうな感覚に襲われる。

散々周囲から、かつきを誑かしているなどと言われて傷ついてきたのに、あの人たちの言葉を否定できないことをするのだと思うと、悔しかった。どんな時でも彼の傍にいたいし、彼の人柄を好きになったのだといつでも胸を張りたかったのに…。

ある日、そんな自分に自信が持てない環境で、彼女にかつきとの関係をほのめかされ、私は確かにぐらついた。

先ほどの彼の様子をみると、これまでの事を話さない訳には
いかないだろう。

そろそろ、方^{かた}をつける時だったのだ。

最近の自分が、情緒不安定な事もほんとは気付いていた。

それでも、真実を確かめるのが怖くて逃げていただけ。いつそ、全
てを話して楽に
なってしまうおう。それで私たちの関係が終われば、その時はしょう
がない。

そう結論を出した儂の顔は、不格好にゆがんだ笑みをしていた。

15・アルカイツクな微笑（後書き）

あの日、大好きな貴方の前で
辛さを隠しながら笑った時

人生で一番へたなつくり笑いをしたと分かり、絶望した。

16・真実と懺悔（前書き）

次は、僕が今まで誰にも話していなかったことを、
解明していき
と思います。

16・真実と懺悔

「ごめん」

ごめんな、ごめんな、ごめん…

唯々、そう言う彼を不思議な気持で見つめた

普段よく泣くのは私のほうなのに、その時私はベッドの横で泣く彼をひたすら見つめた

涙は出ず、泣きたいとも思わない…

その時、私は何も感じていなかった

?
?
?
?
?
?
?
?

それを知ったのは、まぬけな事に彼女本人に言われた時だった。

入社してから三年、そろそろ仕事にも慣れてきて、だいぶミスもなくなってきた。

ただ、同期の人はバリバリ一人で仕事を任されているのに、私はずっと補佐と雑用

ばかりだ。後輩が出来たというのに、頼りにされる事もない。

それどころか、大卒入社の彼らからしたら年下で、頼りない私はどう扱っていいのか
分からない厄介者らしかった。

時々、学生気分抜けきっていない後輩が馴れ馴れしく話しかけてくるが、それも

新人を教育する上ではいけないとすることで、注意しなければいけない。

仮にも先輩である人間に普段、馴れ馴れしく過ぎると、仕事の上でも影響が出るのだ。

しかし、実感がわかず分からないのである。

彼らからすると「せっかく話しかけてあげているのになんだその態度はと」いう事で

倦厭けんえんされてしまう。

そんな環境で、唯一私の救いとなっているのは、新人の時から何かと気にかけてくれて

いる尊敬すべき晋川先輩しんかわと、恋人であるかつきだ。

仕事で落ち込んだ事があれば、かつきに励まされ、パソコンの使い

方や効率よく仕事を
する方法を教えてください。そんな周囲には分かりにくい成長を認め
てくれ、フォロー
してくれるのが晋川先輩。これがどれだけ甘えている事か気付かず、
私は自分なりに
頑張っていると、何時か努力が報われると思いついていた。

当初、私とかつきの関係は勘ぐられていたが、こんな鈍くさい女が
彼と付き合える
訳ないと思われたのだろう。今となっては嫌味を言われる事はあつ
ても、恋人同士と
思われることもなくなつた。

彼とは恋人同士なのだから、本来悔しがらなければいけないのだろ
う。

けれど、付き合っていないと思われるのは、その時の私にとって都
合がよかつた。

入社したてより大分仕事に慣れたと言っても、他の人たちに認めら
れるほど出来る訳
でもなく。一部をのぞいて、若いだけで上司に気に入られ、甘やか
されている様に
しか他の人たちには映っていなかったのだ。私が少しでも出来る事
をやろうとして、
掃除や雑用を請け負う姿すらポイント稼ぎにしか感じられなかった
ようだ。

それでも…不器用なのだし頑張るしかない。
馬鹿にされても、報われなくても、出来るところまで頑張ろうと私
は決めていた。

それが始まったのは、私にとつたら唐突だった。

まず朝に挨拶をしても、女性社員が答えてくれなかった。

聞こえなかったのかと思って、近くまで行ってもダメだった。また変なうわさが広まって

いるのだろうと私は軽く考えていた。

前にかつきとの仲を疑われた時も、こんな態度を取られた事があったのだ。

だから、少しで収まるのならこらえようと考えていた。

…違和感を覚えたのは、女性社員や男性社員に飽き足らず、晋川先輩にまで無視されていると分かった時だった。

晋川先輩は噂話が嫌い、「かつきに近づくのをやめると」詰め寄られた時もかばってくれるような人だった。姉御はだで、ハキハキした彼女が好きだった。

みんなに期待され、頼られる晋川先輩が私の憧れだったのだ。

「彼とは付き合っていない」と言い、嘘をつく私を信じかばってくれた彼女をだますのは

心が痛む。けれど、私はずっとその優しさに甘えていた。とうとう

それが知られてしまった
のかと肝が冷えた。

どんなに綺麗事を言っても、私は結局彼女をだましていた事に変わりはないのだ。

でも、あこがれの存在である彼女にまで嫌われたとなると、悲しくてしょうがなかった。

17・真実と懺悔2（前書き）

長かった為2話に分けましたが、こちらも長くなってしまいました。でも、ようやく真実（ってほどの事でもない？）が書けました。過去と未来が入り混じって、多少読みにくい（上、長いです）かもしれませんが、お付き合い下さるとうれしいです。

無視されるようになったその週の金曜日。私は一人残業していた。今までから比べると、明らかに任される仕事の量が増えていた。その中には、他の社員が任された仕事も交じっており、今までの経験で出来る幅を超えていた。

だから質問を何度もするのだけれど、「過去の資料を見れば分かるな」と言われてしまい、ただでさえ悪い効率がさらに酷くなり、なかなか進まず毎日残業していた。私の課は、残業する人が少ないためほとんど一人で仕事している形だった。唯一の救いは、みんな仕事でどうしても必要な部分は会話してくれるところだ。一週間見ていて気付いたのは、今まで噂などを気にしていなかった人まで私を無視していることだ。元より、お荷物といった感じが抜けなかった私だが、ここまで冷たい対応されるのは初めてだ。

女性社員とすれ違いざまに嫌味を言われ睨まれるのは当たり前だったが、足を引く掛けられたり、仕事を邪魔されるなどされるのは初めてだったので、驚いた。

ただ「あれをしたからこんな対応をされているのだ」確信が持てず、

私はもやもやして
いる気持ちのまま仕事をしていた。
仕事が遅いのも、まぬけなのも私の責任なのだから、しょうがない
とは思うのだけれど
もし何か間違いを犯しているのなら、悪い所を直したい。けれど、
親切に間違いを指摘
してくれる人を私は失ってしまった。

「給料泥棒って、あなたの様な人のことを言うのね」

唐突に、晋川先輩が部屋に入ってきてそう言った。「仕事は碌に出
来ない癖に、男に
媚びるのだけは一人前なんて、本当にいやな女と」その後も続けら
れたが、私は思考が
凍ってしまい何も言う事が出来ず、唯々その言葉を聞くことしかで
きなかった。

彼女に忌々しい、汚いものを見るような目を向けられたのは初めて
だったし、こんな
悪意に満ちた言葉を吐き捨てられるのも初めてだった。

「あなた、私たちには最上もがみあかつきと付き合っていないって言いながら、
実は関係

持っていたんでしょ？それを聞いた時は本当にびっくりよ。まさか
彼が、私の後輩に
手を出すなんて思わなかったし。あなたなんてどんくさい娘を選ぶ
とも思わなかった
もの。

ねえ。分かっていないようだから言っておくけど、彼と私付き合っているの。
あなたで遊びだした時は、ちょうど喧嘩しちゃって珍しい子をつまみ食いしたく
なったのね。そのことは本当にかわいそうだと思うけれど…お願いだから彼を返して
よ。ずっと私、彼のことが好きだったの」

彼女が部屋から出た時、頭の中が真っ白になって何も音が聞こえなくなつた。

?
?
?
?
?
?
?
?

かつきに恋人がいる…?
いや違う、そんな筈はない。彼は私が裏切られるのを恐れている事を知っているし、
もしそんなことがあれば、最初っから言うはずだ。
たとえ遊びであっても、本気であつても彼はそういう人だ。
むやみに人を傷付けることを嫌うし、それ以前に人を近づけることも嫌がるのだ。

だから軽はずみな気持ちで今のようになり、私生活を無視してまで私を
気遣ってくれる

訳がないのだ。それに、ちょっと情けないが「面倒なことはきらい
だ」というのが、彼の
の口癖なのだ。

性格から考えても態度から考えても、晋川先輩が言うような遊びだ
とは思えなかった。

遊びなれた人間からしたら、私なんてとても面倒なタイプだろう。

でも、もしそれが同情からくるものだったら？

妹のように扱われた事もあるし、私の境遇を気遣われている事も知
っている。

普通の恋人よりも、少し過保護に扱われているのも本当は知ってい
るのだ。

かつきは、私の脈絡のない無駄話も聞いてくれたし、美味しいもの
食べさせ

綺麗なものを見せ、様々なことを経験させてくれた。

こんなに甘やかされていいのだろうかと思えるほど、彼は常に優し
かった。

男性経験が全くない私にあきれることなく、辛抱強く付き合ってく
れたし。

不安な時は、深夜でも電話に付き合ってくれた。

今考えれば、かつきにどれだけ甘えていたのかが分かる。

晋川先輩は勿論のこと、私はかつきにすら甘え過ぎていたのだ。

彼に恋人がいるかもしれないという事よりも、かつきの事を信じき
れない自分と、

甘え過ぎていた事実には愕然とした。

それからの日々は、酷いものだった。

任される仕事はさらに増え、晋川先輩とは目を合わせることもすらくなくなった。

そんな私たちの態度に気付いたのだろう。いつからか、上司からもないがしろにされるようになった。晋川先輩は、私の課では何かと重要な位置に立たされることが多く、少しの事でもすぐ頼りにされていた。そんな彼女を怒らせたとなつては、私がここで仕事をするのはかなり難しい。

こんな環境の中でも、私の出来るところまでは頑張ろうと1年はこらえた。

私の私生活のことで仕事を投げ出すのは嫌だったし、何より生活のために働かない訳にはいかない。

少し、違う仕事に就こうかと考えた事はあつたが、今の私ではどの仕事も難しかった。

資格もなく経験もない、昔から興味があつた資格を取ろうと頑張つてはいたのだが、

それが報われる前に私は倒れ、医者からの診断で仕事を続けるのが困難になつてしまつた。

病院に運ばれた時、私はもう限界だったのだろう。
仕事という苦しみから解放されたと思うより、最後まで頑張る事が出来なかった事に
シヨックを受け、しばらく放心してしまった。
かつぎが駆けつけてくれたと知っても、有難いとも申し訳ないとも
思えなかった。

こんなに優しい彼も、もしかしたら私を裏切っているのかもしれない。
そう考えてしまったのだ。
もし他の人と付き合っていなくても、彼は先輩にそう思われてもしょうがない行動をしたことがあるのではないか。そんな事を考え出すと、彼の事を信用することすら怖くなってしまった。

?
?
?
?
?
?
?

今まで一度も言ったことのなかった本音が、口からこぼれだしていった。

かつぎがお風呂から出てすぐ、彼の目を見ずに私は隠していた事をすべて吐き出した。

こんなの、唯の自己満足でしかないのは知っているけれど、別れの

言葉を聞くかも

しれないのが怖くて、私は必死に喋り続けた。

彼のことを疑っているのだと白状しているようで、悲しくてしょうがなかった。

17・真実と懺悔2（後書き）

尊敬していた先輩と、恋人の裏切りに怯えたのが、儂が倒れた本当の理由だと思えます（作者なのにもかかわらず、断定せず）。相談できる人もいず、独りでずつとこらえ続けていたのです。

18・いやなお客の親切よりも（前書き）

初っ端から、過激な表現失礼します。

少しでも、かつぎが儂に溺れている様子が出ればいいなーと思って
おります。

18・いやなお客の親切よりも

儂に話を聞いた途端…

初めて人を殺したいと思った。

俺が話をしようと言いだしたのだが、儂がそれを語り出したのは突然だった。

本当だったらコーヒーでも飲みながらゆっくり話を聞こうと考えていたが、俺が頭を拭きながら椅子に座った途端、彼女はせきを切ったように話しだしたのだ。

話している最中の彼女は、何とか言葉を振り絞っているようで、座っている

俺の前で儂は立っているという、不自然な体勢ながら黙って見守っていた。

彼女の先輩だった晋川という女に、俺は聞きおぼえがあった。確か大学時代の同級生にそんな名前の奴がいたはずだ。

正直、たいして親しかった訳でもないのに、何故そんな事を僕に吹き込んだのか
不思議でしようがない。

もしかしたら僕のことの他に、俺に個人的な恨みの様なものがあるの

だろうか？

僕の話を聞く限り、今までは庇うようなことを言っていたのに、突然敵意をむき出しにするなんておかしいと誰でも感じるだろう。

その上、俺のことを恋人と呼ぶのなんて、頭がおかしいとしか思えない。

もちろん、僕にも多少の問題や確執はあったのだろう。

一人の仕事が滞ること、多くの人間に支障が出る。それは、社会で働く身として痛いほど理解できる。

けれど、それを上回るほどの嫌がらせを僕は一年近く耐えてきたのだ。

仕事が遅かったり、出来ないのなら教えればいいのだ。幼稚としか言えない対応に噂話。社会に出てまでこんな嫌がらせをする人間がいるとは思った事もなかった。

これは、仕事についてのいざこざの範疇を超えている。明らかにいじめだろう。

…だが何よりも、そんな状態に気付くことが出来なかった俺自身に、苛立ちが隠せない。俺の人間関係を把握しているとは言い難いが、一番近くにいるのは俺で間違いないだろう。だからこそ、俺が助けてやるしかなかったのに…。

俺は、一人でずつと堪えてきたのだろう。

話ながら小刻みに震えていた…。思わず、立ち尽くしていた俺を抱きしめたが、

いつかの夜のように、硬くなったままの体が悲しかった。

寒さのせいもあるのだろうが、それが俺に『まだ心を許していない』という証明

の様で胸が痛む。こんなにも彼女を孤独にしたのには、俺の責任が強いだろう。

男女の交際に慣れていなかった頃の俺は、確かに緊張で堅いイメージがあった。

しかし今の彼女は、壁を作っているが故に近くにいっても遠く感じる。

せめて、彼女が倒れた時にこうして話を聞くことが出来ていたら…今とは違う

状況だったのかと考えると、悔やんでも悔やみきれない。

俺は、まるで自分がすべて悪いというように話していたけれど、それは若い故の

盲目的な思いこみだろう。欲目が入っているのは分かるが、彼女は本当に頑張っていた。努力すれば必ず結果がついてくるだなんて、俺には言えやしないけれど…。

彼女はもう少し認められても、報われてもよかったはずだと思うのだ。

それに、弱っているところに俺との関係をほめかされたとあっては、参^{まい}っては、参^{まい}ってしまつのも疑ってしまつのもしょうがない。

俺だって「夢に昔の男がいたと」嘘でも言われてしまえば嫉妬しだらう。

だからこそ…そんな彼女を追い詰めた社員も、晋川という女も許せない。

思わず憎しみが込み上げてくるが、彼女にそれを言えば余計に追い詰めてしまい

そくな為、必死に表面に出さないようにした。

まだ夢は全てを話している訳ではないだろうと感じたが、それ以上聞き出すことは

とても出来そうにない。

…焦ってもいいことはないだろう。今日はやっと少し彼女を知る事が出来たのだ。

これまで聞いてあげることの出来なかった話や我が儘を、辛抱強く聞いて行こうと

心に決め、その日俺は彼女を抱きしめながら眠った。

18・いやなお客の親切よりも（後書き）

都々逸『いやなお客の親切よりも 好いたお方の無理がよい』（詠
み人知らず）

俺には君しかいないんだよ

19 ダブルベッド（前書き）

サブタイトルが…。

いや、今まで暗かったので、能天気な雰囲気伝われば何よりです。皆様の箸休めになれば成功です。

19・ダブルベッド

朝、目覚めると夢が隣にいることに安心した。

彼女と同棲していると言っても、同じベッドで目覚めることはあまり多くは

なかった。同棲ししたのは夢が倒れたのがきっかけで、人間不信になりかけて

いる節があったため、寝る時まで傍にいと安らげないと考えたのだ。

そのため夜を共に過ごしても、朝まで共にいることはまずなく、朝には一人に

なれるようにと気遣っていた。夢の体を、心を一番に大事にしているのだと

証明したかったのだ。俺は「体だけを目当てに彼女と同棲しているのではない」

と伝えたかった。

本当は、一日中彼女の傍にいたかった。

：これからの約束を口にした事はないけれど、ずっと共にいるのだから焦る必要

はない。

それだけを支えにすれ違いの生活にも耐えてきた。

倒れてからの夢は、まるで周りを拒絶するようによく眠った。

だから、俺の仕事が忙しくなればなるほど、彼女と話す時間は減っていた。

ほんの少し、俺の帰りを寝ずに待っていてほしいと思ったこともあったが、寒い

リビングで待ち切れずに眠っている姿を見つけてからは、先に寝ているように

お願いするようになった。

それでも、これからは遠慮しなくてもいいのだろうか？

俺の腕の中でも安心して眠ってくれるようすを見ると、寝室を分けていたことが

無駄に思えてしまう。

こんな風に、毎朝ともに目覚めることが出来れば、幸せだろう…。起きている彼女に逢えなくても、寝顔を毎朝見る事が出来れば満足できる気がする。

今日にでも、ずっと欲しかったダブルベッドを買いに行ってもいいだろうか？

…欲が出てしまっているのは分かっているが、俺が許してくれるのならずと傍に

いたい。今はまだ早いかもしれないが、近いうちにベッドを新しくしようと思いに

決めた。

俺は早速、俺が喜びそうなデザインを下見だけでもしようと思っで探してみた。

眠っているとはいえ、彼女と離れたくなかったのでベッドまでノー

トパソコンを
運んできて、儂の横で寝っ転がりながらデザインを眺める。普段、
仕事をするため
だけに使っているようなものなので、『儂との生活のために』活用
できると思うと、
それだけでうれしく思えた。

知らず知らずに頬が緩んでいたのだろう。

寝ぼけ眼の彼女が「なに、嬉しそうな顔してみてるの？」と聞いて
きたときは

本気で焦ってしまった。すぐにも寝室を一緒にしたいと言いたい
のだが、彼女に

とってはどちらがいいのかまだ分からない。このことはもう少し時
間を置いた方が

いいだろうと俺は適当に質問をはぐらかし、パソコンを閉じた。

まだ、問題が解決したわけではない。

でも、俺は昨日までとは違いどこかすっきりした表情になった儂に
安心するあまり、

早期に解決することを諦めた。それで前に後悔したのにもかかわら
ず、俺はこの

問題がどれだけ深刻なのかをよく理解していなかったのだ。

その日の夕方、俺は久しぶりの休みを満喫し、儂と近場のスーパー
まで買い物に

来ていた。あの時はまだ、買い物帰りに突然意識を失い、病院に運
ばれることになる

とは思っていなかった。

19 ダブルベッド（後書き）

続きは、第三者目線でお送りします。

20・永遠の片想い〜晋川先輩 side〜（前書き）

一端こちらで、儂を苦しめた晋川先輩の過去、心情などを挟ませていただきます。彼女にもいろいろあったんだな〜と、流し読みしていただけたら幸いです。

20・永遠の片想い〜晋川先輩 side

何時からか、可愛い後輩であった彼女が、憎くて憎くてたまらなかった。

もがみあかつき
最上暁くと会ったのは、大学生のころだった。

同じ大学に通っており、ムードメーカーだった彼は何かと注目されていた。

はじめは誰とでも気兼ねなく話すし仲良くなれるのに、ふとした拍子にみせる冷たい眼差しが、気になって仕方がなくなった。

私は周囲から真面目で取っつきにくいと言われる存在で、彼のようなタイプは
始め苦手だった。でも彼の不思議な雰囲気謎を掴みかけた私は、
気が付いたら
いつも彼のことを探していた。

誰の懐にも入れそうなのに、自分の懐には入れさせない。

そんな一線引いた接し方が傍目で見ている、気になってしょうがなかったのだ。

1年くらいたった頃には、私は彼を好きなのだと自覚した。

それから、彼と同じサークルに入ったり、同じ授業をとろうと必死になった。
少しでも接点が欲しかったのだ。
した事のない化粧品も覚えたり、地味だった服装も雑誌を買いあさって研究した。

今まで自分から動いたことはないし、好きになった事もなかった。
これまで付き合ってきた人たちは、告白されて嫌じゃなかったら付き合うという
もので、誰一人として『恋をしている』という感覚を味わえるものではなかった。
けれど、最上くんに対する思いは、今まで感じた想いとは比べようもないほど、
強く厄介なものだった。

何とか彼に友人と呼ばれるほど近づき、虎視眈々とその機会をうかがっていた。
彼から少し優しくされれば有頂天になるし、彼に新しい彼女が出来たと聞いた
ときは、嫉妬でどうにかなりそうだった。それでもずっと想い続けていたのは、
最上くんが誰に対しても本気ではないと分かったからだ。
彼女の話も振ってもそれ程くいついてこないし、別段照れた様子もない。
きくと彼は、心の底から彼女たちを愛していないのだろうと、女の勘が働いた。

もちろん、彼女がいるときに浮気したなどの話は聞かなかったし、フリーの時に少し女遊びが激しくなると聞いたぐらいだった。けれどそれさえも、あれだけ格好いいのだから頷けるといふものだ。その上、最上くんは優しくて明るい。まるで私の太陽のような存在だった。

日向に咲いている名もない花のような私にも、満遍なくぬくもりと元気をくれる絶対的な存在。それは誰のものにもならないと知らしめられているようで苦しかったけれど、「もしかしたら…私なら彼の気持ちを分かっただけであられるかも知れない」という感情が抑えきれなかった。

現に、彼のふとした表情に気づいたのは私だけなのだ。だから、一度でもチャンスを与えれば、彼は私と言う存在に気が付いてくれるはず。そんな空しい期待だけが高まった。

ある日、親しくなった彼の友人から噂を聞かされた。『最上は、友達に手を出そうとは思わない』というのだ。過去に友達と関係を持ったことでもめたらしく、それっきり友人と

はそういう関係
にならないと決めているらしかった。

その言葉に、私は一人納得した。そうか。彼に近くなりすぎたから、私は女として
今は見られていないのだ。少し目線が変われば、私の事も女として扱ってもらえるはず。もし私自身を見てもらえさえすれば、好きになってももらえる自身がある。
その為の努力を惜しんだ事はないし、彼が嫌うタイプも熟知している。

大学での四年間では失敗してしまっただが、社会に出れば視点が変わるだろうと期待をしていた。残念なことに、同じ会社に就職することはできなかったが、目と鼻の先の会社に勤める事は出来た。彼ほど有名な会社ではないが、必死に働いて認められようとした。もちろん、女を磨くことも忘れはしなかった。彼が今まで付き合ってきたのはみんなあっさりした性格で、すらっとした体格の女性だったので、少しでもそれに近づこうと頑張った。エステにだって毎週行っだし、ネイルから髪まで手を抜いた事はない。

努力すれば、努力するだけ彼に近づき、認められると思っていたのだ。

でも、彼がわたしを見てくれる事はなかった。

一度だけ、あまりのつらさに耐えきれなくなり、彼を押し倒した事がある。

恋人と別れたばかりで、どうしても人恋しいのだと泣き落して、一度だけ抱いて

もらった。

夢のような瞬間だったにもかかわらず、私は以前より貪欲になり、それから数度彼に

誘いをかけた。一番最上くんが嫌う事をしてしまったと気付いた時には、もう遅かった。

…彼が私と会ってくれる事は二度となく、連絡もとれなくなってしまうた。

元より、彼の家は誰も知らず、踏み込めないというのが友人たちの間では暗黙の了解

だった。彼と関係を持った時も、せめて思い出を刻みこもうと私の家で抱いてもらっ

た。彼の形跡を残そうと必死だったのだし、好きな人を自分の領域に招ける事が嬉し

かった。けれど、彼はそんな事慣れっこだったのだろう。

今さっきまでここに彼がいたというのに、最上くんが部屋を出て行った後は…

ぬくもりすら残っていなかった。

20・永遠の片想い〜晋川先輩 *side*〜（後書き）

長くなったので、二話に分けます。

21・磯のあわび〜晋川先輩side〜(前書き)

都々逸「磯のあわびを九つ集め ほんに苦界(九貝)の片思い」
詠み人しらず)

21・磯のあわび〜晋川先輩 side

彼と連絡が取れなくなってから、数年はがむしやらに働いた。

どんだん後輩がやって来て、お同様と呼ばれるほどの存在になったが、いまだに私は

彼を好きなままだった。様々なタイプの人と付き合ってはみたが、誰一人として彼の

面影を消してくれる人はいない。

あまりに強烈な光に焼かれたため、まるで盲目になったかのように只管、彼を求めて

いたのだ。『無謀なことをしている。諦めた方がいい』何度言い聞かせても、

私の心の中から最上くんという太陽が消えてはくれなかった。

でも…それでも、ただ彼の近くで働けるだけでいい。

その一心で仕事に力を入れた。今まではきついと言われ後輩に慕われる事はなかつ

たが、最近高卒ではいつてきた蓬郷むらさき 儂さんという女の子にどうやら好かれていたようだった。

コミュニケーションをとるのが下手なようだが、それは私も経験したことなので、

自分の事のように応援してしまい、フォロー役も率先して出た。

彼女は大卒生たちより、はるかに真面目で素直な子だ。もともとの性格もあるのだろう。ミスが多かったり仕事が遅かったりするが、つい助けたくなる印象の子なのだ。それもこれも、彼女が必死に頑張っているからであるが、少の事なら許せてしまっかわいらしさが羨ましくもあった。

蓬郷さんの様に守ってあげたくなるタイプだったら、最上くんも私を見てくれたのかしら…？

自分の性格を気に入っているし、普段だったら考えもしない事が、蓬郷さんと話しているときには浮かんだ。きっと、周囲は私を遠巻きに見ているだけなのに、彼女だけは心の底から私を好いてくれているのが分かるからだろう。この前など「しんかわ晋川せんぱいは私の目標です」とまで言って貰えたのだから、可愛く感じないわけがなかった。

だから、彼女が苦手な部分は極力補佐するようにして、変な噂を立てられたとなつたら、根も葉もない事を広めないように注意した。私も、噂には悩まされた事があるから、彼女の辛さは分かるつもりだ。

それなのに…。
それなのに、最上くんが彼女と付き合い始めたと聞かされたときは、
やっと瘡蓋かさぶたに
なった傷口を、思いつきりひつかきまわされた気分だった。

本当は、前々から彼たちの事は噂になっていた。
この会社でも最上くんは人気があるのだから、公園で一緒にお弁当
を食べていた等と
やっかまれてもしょうがないだろう。それとなく蓬郷さんには「気
を付けた方が
いいと」注意していたのだが、とうとう一番聞きたくなかった事を
聞いてしまった。

どうして私はダメで、私の近くにこの娘ならいいの？
私のなにか、彼女より劣っているというの？

数ヶ月前から、彼女に対する女性社員の対応がひどくなっているの
は知っていた。

それを助けるのは何時も私だけで、もし私が彼女を見離したら、こ
の会社で遣って
行けなくなるかもしれない事も分かっていた。

それなのに、私は彼女の世話をするのをやめただけでは飽き足らず、
ミスをいちいち

人前で論あげしい攻め立てた。上司たちや男性社員が彼女をかばえば、彼

らすら

も邪険に扱った。私は事あるごとに細かい作業なども頼まれ、頼りにされていたので、

そつすることで彼らが彼女を見離さざるおえない事は分かっていたのだ。

その時の私は、天涯孤独の身の彼女がこの会社で働けなくなれば、最上くんを頼る
かもしれない事など、微塵も思いつかなかった。

きつとだいがこの時点でおかしかつたのだろう。
気がついたら私は、彼女の携帯に毎日10件を超える無言電話をしていた。

最初は、ただ早く彼の家から出て行くように促すつもりだったのだ。それなのに彼女は着信拒否をしたり、携帯電話を変えるばかりで、一向に彼と別れようとしなかった。最上くんにはバレないように嫌がらせをするのは大変だったが、
生意気なことに彼女は私とわたり合おうと必死になっていた。

あんな鈍くさい娘が敵う訳がないのに、全くおかしいたらなかった。

幸い、私は一人暮らしの出世株で、人を雇うお金には困らなかった。

何度か彼女

一人の時を狙い、買い物帰りの彼女を襲わせた事もあるが、憎らしいことに大した

ダメージを与えることは出来なかったようだ。

かすり傷程度を負わせただけで、頼んだ人間は怯えて「もう協力はやめると」言い

だした。全く、使えない奴らばかり。

男に強姦させることも考えたのだが、他の男の手垢のついた彼女が
もしも最上くん

触れたら、彼まで穢れてしまう。そのことが気がかりだったのと、
犯人が私だとバレて

しまうのではないかという恐れから、思い切った行動は出来ないで
いた。

でも、私はとうとう切れてしまった。

あんなに忠告してあげたのにもかかわらず、あの女が最上くんの隣
に当たり前に

居座っているのが許せなかった。しかも仲良さげにスーパーから出
てきた姿は、まるで

新婚夫婦のようにみえて怒りで目の前が真っ赤に染まった。

だから私は、持っていた包丁をあの女に振りかざしたのだ。

21・磯のあわび〜晋川先輩 side〜（後書き）

だいぶ前から考えていた話が出せて、私は満足です！

私の中での暁（かつき）は、夢以外に対してはひどい奴です。

晋川先輩の発言は、思い込みと嫉妬と『ほんの少しの思い出』で出来ております。暁は夢に対してだけ、随分甘く優しく猫かぶっています。

私は、基本的に絶対的正義も悪もあまり信じていませんが、今回は彼女に悪役をやってもらいました。この話には、病んでる人間が多くてダメですね。

お付き合いいただきまして、ありがとうございました。

22・二世も三世も(前書き)

都々逸「二世も三世も添おうと言わぬ この世で添えさせればい
い」詠み人しらず

間が開いて申し訳ないです。

かつきに会社での事を洗いざらい喋ったけれど、本当はまだ言っていない事が

あった。会社を辞めて、彼との同棲を始めた頃に嫌がらせ電話がかかってくるようになったのだ。

大抵は無言電話で、何が目的なのか分からなかった。

けれど、会社を辞めても嫌がらせを受けるということは、きっとかつきとの事を

快く思っていない人の仕業だろう。その証拠に、決まって彼が居ない時間帯を

狙って電話がかかってくるのだ。

卑劣なやり方だとは思ったけれど、私に取ったら都合だった。

かつきに、こんな事をされていると知られなくなかったのだ。

唯でさえ不安定な状態だという事で心配されているのに、これ以上迷惑をかけるのは嫌だった。

しばらく経つと、郵便受けに脅迫めいた手紙が届くようになった。

宛名はなく、切手も貼っていないことから、直接ポストに投函されていることは

確かだ。それも、昼間を狙って置かれていたので、彼に見つかるこ

とはなく処分
していた。

本当はあの段階で彼に相談するなり、警察に頼るなりすれば良かったのだ。

……それなのに、あの時の私はこの嫌がらせを一人堪える事で、今まで甘えてばかりいた状況から抜け出せるのだと信じて疑っていなかった。

そんな買い被りが災いしたのだろう。

ある日、一人で買い物に出ていた時に見ず知らずの男の人に、いきなり突き

飛ばされた。その時は大した怪我もなく、買ったばかりだったペアのマグカップが割れた位だ。

しかし、もう少しで私は階段から転げ落ちる所だった。

周囲にいた人たちは、私が蹴躓いただけだと思ったのだろう。まるで何もなかったかのように通り過ぎていく。

唐突に怖くて仕方なくなった。

これまで、嫌がらせをされるほど誰かにとって煩わしい存在なのかと落ち込んで

はいたけれど、階段から落ちたら怪我どころでは済まないはずだ。

私は、

殺したいほど憎まれているの？

悲しくて、苦しかった。

近くにいた人も、誰も私の心配などしていない。

この世で誰一人、私の事など必要としていないようで、怖くてたまらなかった。

恐怖に駆られた私は、とりあえずどこかに逃げたて走り出そうとした。

でも、そんな私の手に割れたマグカップが触れた事で、何時も見守ってくれる

彼の存在を思い出した。

「……かつき」

そうだ。まだ、ここには私が存在することを望んでくれる人がいる。誰に認められなくても、彼は私を心配し必要としてくれる。

だから彼だけは信じ、大切にしようと思ったのに……。また私は、頑張り方を

間違ってしまったようだ。

?
?
?
?
?
?
?

買い物帰りの私たちの後ろから、女の人が奇声をあげながら襲いかかってきた。

その人の手にはナイフが握られていたのだけれど、とっさの事に避けようだなど

考えが浮かばなかった。気がつけば私はかつきの腕の中に抱き込まれており、

彼の背中には深々とナイフが刺さっていた。

ぬるりとした感触に、手にべったりと付着したものが血だと理解したのは、周囲
の人が何事かを騒ぎ出した時だった。

なに…？何が起きているの…。

この血は誰のモノ？

かつきは何故、私を抱きしめながら気を失っているの？

呆然と彼を抱きしめていた私の耳にサイレンが聞こえてきて、無理やりかつき

から引き離そうとされたので、必死に抵抗した。

いやだ…。この手を放したら、もう二度と彼に逢えないかもしれないな

いと漠然と
不安を感じた。

彼の顔がこわかった。

どんなにきつく抱きしめていても血の気が引いてきて、顔は青ざめ、
どんだん
体が冷たくなっていく気がする。

「だれか！たすけてえ！！」

そう叫びながらも、彼から引き離されそうになった私は抵抗して
いたのだから、

救急隊員の人はどう手をつければいいのかわからない様子だった。
普通に考え

れば、かつきを彼らに任せれば一番いいのは分かるのだけれど、白
い服を着た

救急隊員は、まるで彼を迎えにきた死神の様に思えたのだ。

「はかな、だっ…いじょうぶ、だっ」

私の様子に見かねたのか、かつきは突然眼を開けるとそう言って笑
ってくれた。

笑える状況じゃないはずなのに、余りにもきれいに笑った彼の表情
におもわず

力が抜けて、そのあとは救急隊員の指示を素直に聞くことが出来た。

病院に着いてからは、ひたすら彼が助かる事を神に祈っていた。神様なんて、普段はあまり頼った事もない。

両親をこんなにも早く奪った神様を、信じるのが辛かったのだ。

どうして神様

が居るのなら、私をこんなにも苦しめ、大切な人々を奪うのだろうか。。。

また私は、ようやく見つけた大切な人を失ってしまうのだろうか？

かつき、かつき、かつき、かつき

お願い、神様でもなんでもいいから、どうか彼を助けて。

私から彼を奪わないで。。

22・二世も三世も（後書き）

ちよつと、卑屈な表現が入りました。

不快に感じた方がいらつしやったら、ごめんなさい。

錯乱している時なら、これくらい思ってしまいそうだなーっと考えまして。

此処まで読んでいただき、ありがとうございました。

少しパソコンの調子が悪く、遅くなって申し訳ないです。

23・譲れない想い

「はーかな」

涙ぐんでいる彼女は少しかわいそうだが、とても可愛らしく見えた。僕は泣きすぎたのか、目元も鼻も真っ赤に染まっている。

「こっちにきてよ」

俺はベッドに横たわりながら、まるで何事もなかったかのように彼女を呼び寄せる。

それでいいんだ。これは、彼女が気にする事じゃない。

「喉が渴いたし、風邪引いた時みたいに林檎兎つくってよ」

くしゃりと、今にも泣き出しそうな顔をしているけれど、今日は引いてあげない。此处で引いてしまったら、きっと二度と僕は俺の前に現れなくなってしまうだろう。

…そんな事を許しはしない。

「いっばい心配かけてごめんね？ 不安にもさせちゃって、ごめん」

でも、儂を手放すことだけは出来そうにないよ

今までの意地もプライドも、彼女の為なら捨てることなど容易いけれど、
彼女から引き離されたら、とても正気でいられる自信がない。

「ほら、儂。早く此方において」

そうしないと、こちらから捕まえに行くよ？

?
?
?
?
?
?
?
?

俺が目を覚ました途端、目の前に見えたのはどこかデジャブを感じる白い壁
だった。

どうして、俺はこんな所にいるのだろう？

そんな事をボケっと考えてはいると、ドアを開けて看護師が入って

きた。

俺が目覚めているのを見るや否や、慌ただしく医者や看護師が入れ替わり立ち替わり部屋にやってきた。しかも、落ち着いたと思っただ直後に警察のお出まし

だ。全く、こちらは怪我人なのだから勘弁してほしい。

警察や医者の話で、俺はいろいろと理解させられた。

これまで俺が拳動不審気味だったことや、俺に対するおびえた様子も、この事で納得できる。

俺にでまかせを教えるばかりか、彼女を害しようとした晋川という女に怒りがこみ上げる。

その女が言うには、嫌がらせは長きに渡っており、嫌がらせの電話や手紙は日常茶飯事に行っていたらしい。

…そんな事にも何故今まで気付かなかったのかと、自身に対して怒りがこみ

上げる。いくら仕事が忙しいと言っても、一緒に暮らしていたのだ。

彼女の様子がおかしかったのは、精神が不安定だったせいにしていたのは否め

ない。俺の様子がおかしくても忙しかった俺は、知らず知らずのうちに見て見ぬ

ふりをしていたのだ。

どうして気付いてあげられなかった？

どうして分かってあげられなかった…。 儂が倒れた時に何度、自問
自答したか

知れない言葉が頭をめぐる。

だが彼女の言葉を信じれば、 儂自らその悪質な嫌がらせを俺に悟ら
れないように

していたらしい。 どうして…。 そんな言葉が浮かびはしたが、 流石
にそれは
聞かずとも分かる。

忙しくてまともに休みすら取れなかった俺に、 彼女は気を使ってい
たのだろう。

そう考えれば俺が以前、 休みの日に仕事に行くと言った時の異常な
様子に納得が

いく。 儂は一人になる事を恐れていたただけではなく、 今度はどんな
嫌がらせを

受けるのかと恐怖していたのだろう。

あの日、無理にでも彼女についてあげればよかった…。

後悔が胸に押し寄せてくるが、それを今言ってもしょうがない。 ま
ずは、そんな

優しい彼女を引きとめなければ。

少し臆病なところがある彼女は、きっと自分のせいで俺が怪我したのだと病院の

どこかで一人泣いているだろう。…そんな筈がないのに。たとえば俺が死んだと

しても、彼女を助けられたら満足なのに。

どんな人間よりも、俺は彼女を選ぶ自信がある。それは俺にとって当たり前的事

なのだ。何を犠牲にしたとしても、俺と共に居たい。

俺と一緒にいる事で、俺が晋川に苦しめられたと知った今でも、彼女を解放して

あげようだなんて思えなかった。どれだけ苦しんでいる姿を見ようと、泣かせて

しまったとしても、俺が居ない日常が想像できなかった。

…彼女の幸せを願っているのに、俺以外の人間の傍で笑っている姿など見たくも

ない。彼女の笑顔を見たいのに、俺以外の人間が向けられていたらその相手を

殺してしまいたい。

それが相反する思いだなんて、俺は考えない。

俺を、いっそ閉じ込めてしまいたいくらい好きなんだ。

俺は何時か貧血で倒れた時のように、看護師に頼んで僕を病室まで呼んでもらうことにした。

23・譲れない想い（後書き）

自業自得の言葉で片付けるには悲しいほど、晋川先輩は報われてませんね…。でも勝手な理想論を言えば、好きな相手の幸せを例え苦しくても願えなくなったら終わりなきがします。

暁（かつき）は本文中ではあのように言ってますが、いざとなったら引ける人間です。唯、そのいざがこないように全力で妨害しそうですが（笑）。

此処までお付き合いいただき、ありがとうございました。

24・終焉へ向けて

「僕、はかな傍にいてよ」

止まっていた私の心が、動き出したのを感じた。

「僕がいなくちゃ、…俺駄目だよ」

かつきの声が体中を侵食していく。

「ねえ、僕。此処にいて？」

俺を置いてどこにもいかないで…」

今まで私ばかりが依存して、必要としていると考えていたけれど…。

私も彼に求められていると自惚れてもいいのだろうか？

ベッドに寝転がりながら、弱弱しく手を伸ばしてきた彼に抵抗することほはでき

なかった。

?
?
?
?
?
?
?
?

予定より、一週間も早く退院することが出来た。
出血量に比べ、傷自体は大したことがなかったのが幸이었다よう
だ。

その為、俺は嬉々として儂と一緒に病院を後にした。

未だに人の多い所を嫌う儂は、病室に来て他患者を気にして居
心地が悪そう

だったし、俺自身病院の匂いも雰囲気も苦手なのだ。

例え検査のためとはいえ来るのが嫌なのに、こんな風にまともな動
き事も出来な

い状況で数週間泊まらなければいけないのは、他の人には失礼だが
きつい。

儂に聞かなければいけない事もあるし、少しでも早く落ち着けるあ
の家に帰りたい

かった。

予想していた通り彼女と家に入った途端、どこかほっとした表情を
した姿を見て
嬉しくてしょうがなかった。自分の好きな場所を好いてもらえて、
まるで

俺自身すらも受け入れられたように思える。

病院で、儂は今まで晋川からされていた嫌がらせの内容をぽつぽつ
と話して

くれた。しかし、以前に階段から落とされそうになったというのは
初めて聞いた

ので、思わず警察にいる晋川を思いつき殴りに行きたくなる。

入院しているときに大学時代からの友人が来てくれた事で思い出したのだが、

俺はあの女と一夜だけ関係を持っていた。確かにどこかで見た顔だとは思って

いたが、濃くなった化粧や振りみだした髪、なにより鬼気迫る表情などでまさか

あの時の女だとは思えなかった。

第一、たった一度の関係から何年たっていると思うのだ。

確かな記憶ではないが、少なくとも六年以上は経過しているはずだ。それでも、

俺を大学時代からずっと好きだったから嫉妬したのだと言われても、理解でき

ない。どうしてそれが夢に対する嫌がらせにつながるんだ？

怪我はなかったと言っても、危うく階段から突き落とされそうになったことが

あるなど、今回の事がなくても警察沙汰だ。

今まで聞いた嫌がらせや陰口だけでも驚きだったが、今回俺が刺されたことから

考えて、裏ではもっと犯罪ギリギリの事をされていても可笑しくないように

思えた。

夢が無事でよかった。

刺された時以降、初めてほっとしたかもしれない。最初はただ、彼女に悪意だけではなく刃物すら向けられたということに憤りを感じていたが、これはまだ運が良かったのかもしれない。刃物でいきなり襲いかかる様な人間だ。俺のいない所でもっと恐ろしい計画をしていたのではないかと、震えが止まらなかった。

そこで初めて、俺の今までの行いの悪さを反省することとなった。今回の晋川という女の行動はいき過ぎているが、儂と出逢う前まで俺は真面目に女性と付き合ってた。正直に言えば、一夜だけの関係の間など数えられない。

大してモテる訳ではないが、人当たりを良くして女性に優しくすれば、それなりに相手に不自由はしないのだ。母はヒステリー気味だが、俺はおばあちゃんっ子だった為、女性の扱いは自然と身についていた。

ヒステリー気味で自分の主張しか押し付けられない女など、いい母だなんて思えない。祖父を先に亡くした祖母の様子を見ていれば、結婚したいとも思えなかった。

だから、どんなに好きだと感じていても、儂との結婚を意識す

ることは
あっても…実行しようとは考えられなかった。

けれど今回の事で思い知った。俺は彼女とずっと共に生きて
いきたい。

もしかしたら、また戸惑わせて悩ませてしまいかもしれないが…。
彼女を困ら

せてでも、俺の未来が欲しいと思った。格好よく、俺が幸せにして
やるだなんて

言えやしないけれど、俺が居れば大変な時でも笑える気がする。
俺と居られるなら、親父のように浮気などしない。

俺自身、いい親など見た事もないから戸惑うばかりだろうが、彼女
となら子ども

を育てるという大変さですら、味わってみたいと思える。

まあ、まだ子供と俺を分け合う気などないから、何年か先の事にな
るだろ

うが。

もちろん結婚することで全てが解決するとは思っていない。

それでも…少しでも彼女の事を大切に想っているのだと、俺は独り
ではないのだ

と実感して欲しかった。

まずはどう彼女を口説き落とそうかと、楽しい悩みに頭を抱えた。

24・終焉へ向けて（後書き）

あと一話で、本編を完結させようと考えておりますので、もうしばらくお付き合いくださると嬉しいですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8106u/>

恋路の闇

2011年10月2日18時38分発行